

仙台まちづくり若者ラボ2025

「子育てが楽しいまち」への 小さく、たしかな一歩



Step A～パパとまちラボ～

安倍、大川口、嘉手川、加藤、佐久間、佐藤、田口

『子育て』

と聞いて何を思い浮かべますか？

仙台市の理想と、親たちが直面する現実

仙台市が目指す姿 = 「子育てが楽しいまち」



プランのめざすすがた

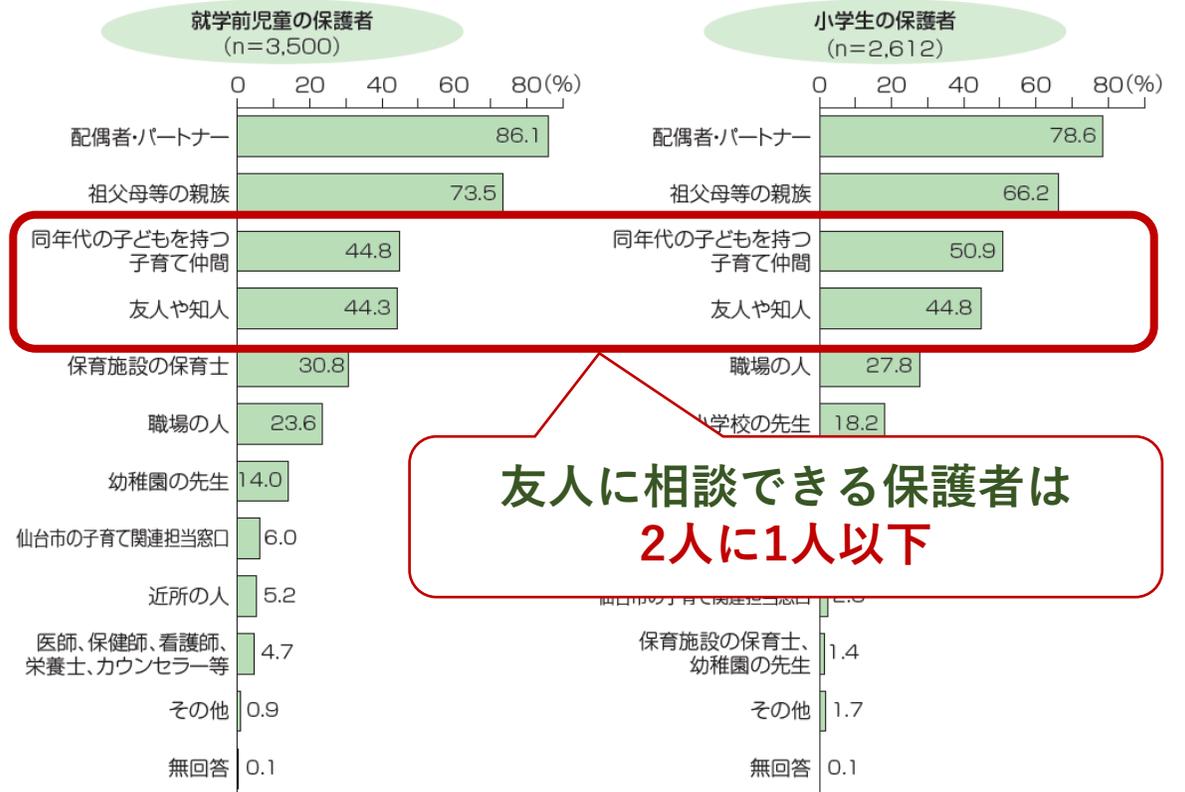
わかももの じぶん しあわ い
こども・若者が自分らしく幸せに生きられるまち
みなでささえる子育てが楽しいまち

せんだい
仙台

資料：せんだいこども若者プラン2025

悩みを友人に相談できる保護者は多くない

図表18 子育てに関して気軽に相談できる人(場所)



友人に相談できる保護者は
2人に1人以下

資料：仙台市こども若者局「子ども・子育てに関するアンケート調査」(令和5年度)

仙台は行政サービスや施設は充実している。
しかし、親同士の「横のつながり」が圧倒的に不足していないか？

仙台市の子育て支援システム：プレイヤーはそろっている

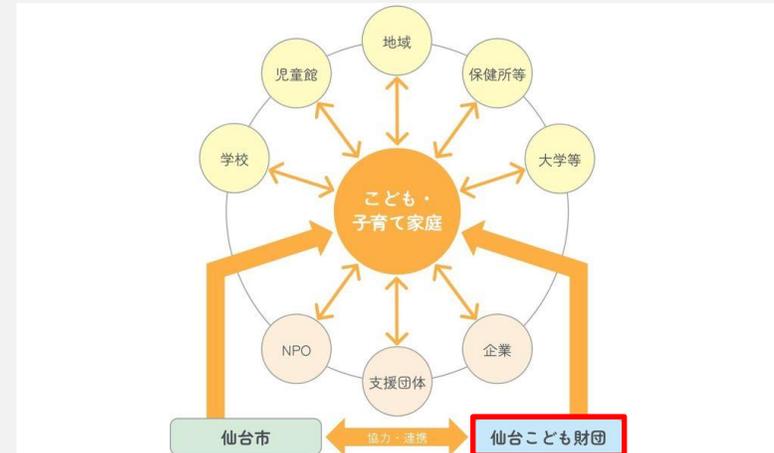
フィールドワークの実施

●対象

- ・ 仙台こども財団
- ・ 実際の子育て世帯の親4組

●仙台こども財団概要

子育てが楽しいまち・仙台」の実現に寄与することを目的に、令和5年に設立された財団



●分かったこと

- ・ 仙台市にはすでに数多くのプレイヤーが存在し、各層で役割分担がなされている。
- ・ 支援の「量」や「数」自体は決して少なくない。



構造的課題：豊富なリソースが当事者に「届かない」ジレンマ

●見えてきたギャップ

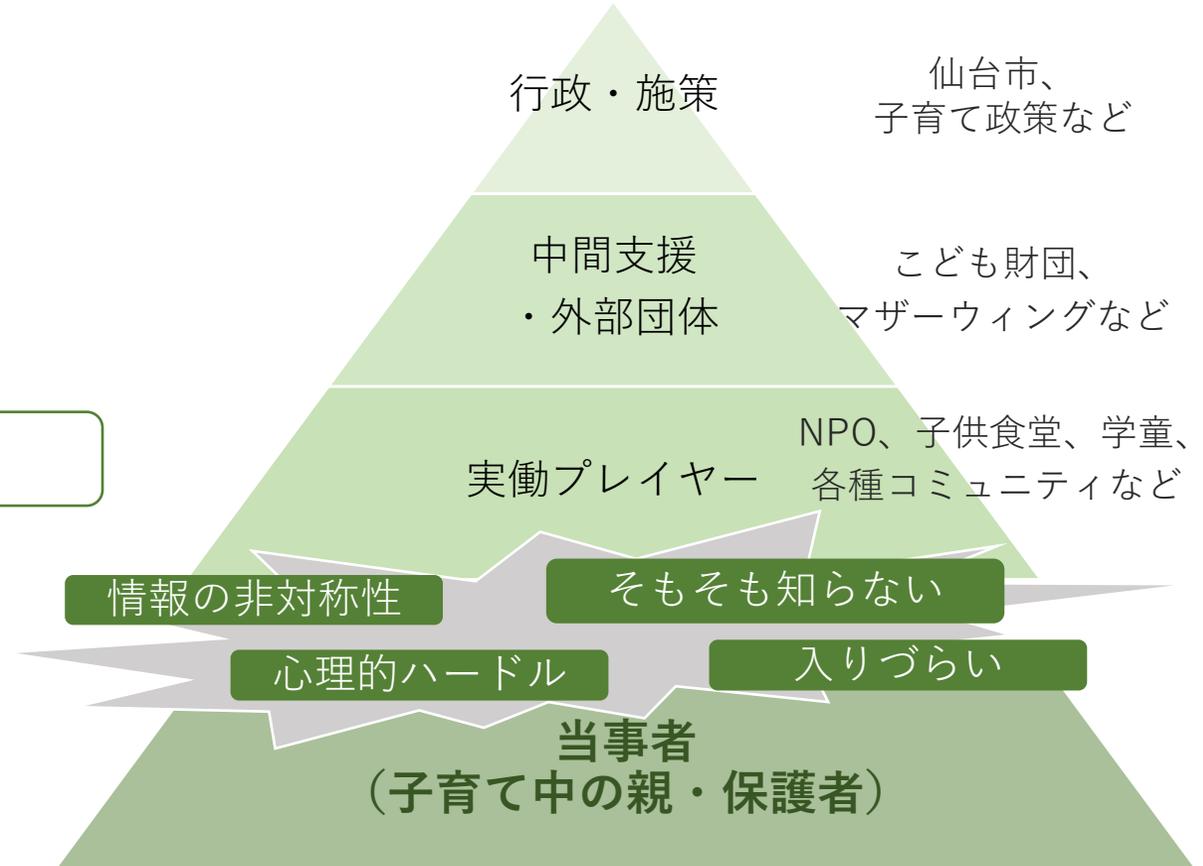
ピラミッドの上層～中層は連携できているが、最下層の親へのラストワンマイルが繋がっていない。

既存のコミュニティは『既に出来上がっている』ように見え、新規参加の心理的ハードルが高い。

「支援があること自体知らない」

「コミュニティに入りづらい雰囲気がある」

「自分には関係ない場所だと感じてしまう」



単にサービスや施設を増やすだけでは解決しない。
既存のリソースを繋げるための「心理的ハードルを下げるきっかけ」が必要

先行事例ヒアリング：3つの教え

インタビューを実施

●対象

NPO法人エムケイベース代表 サイトウ氏

●団体概要

同じマンションに住む転勤族のママたちが主体となって立ち上げた、親の居場所づくりや情報発信を行う子育て支援団体



「続けることが目的ではない」

コミュニティは無理に持続させるものではない。
新陳代謝があり、自然に生まれは消えていく社会が理想。
やる側が疲弊する方法は続かない。

「好きなことで繋がるのが強い」

「集客」を目的にするのではなく、共通の趣味や関心ごとで生まれるコミュニティは無理なく自然で、かつ強固なつながりを生む。

「行政任せにしない」

行政には「公平性」の壁や担当者交代という課題があり、柔軟な連携が難しい。
市民が主体的に動くことが重要。

そもそも、『楽しい子育て』
って何ですか？

視点の転換

問いからの気づき

「楽しい」の定義は一人ひとり違う。

行政や誰かが提供するものではなく、当事者である親自身が見つかるもの。



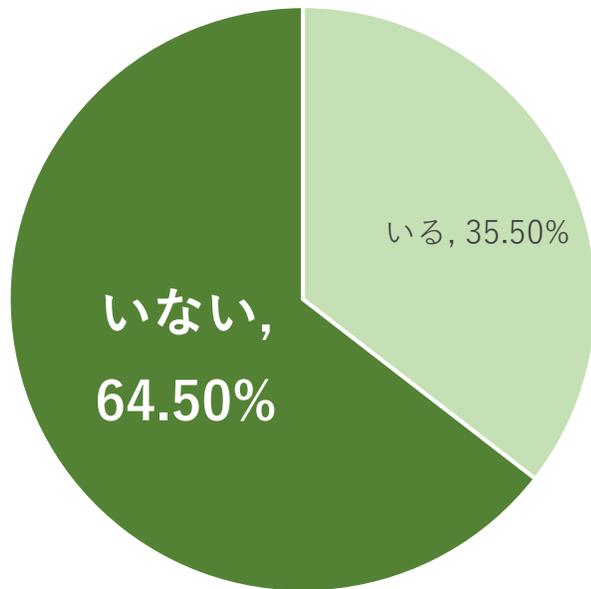
チームAの新たなミッション

「解決策」を提供することから、
「対話のきっかけ」を創出することへ。

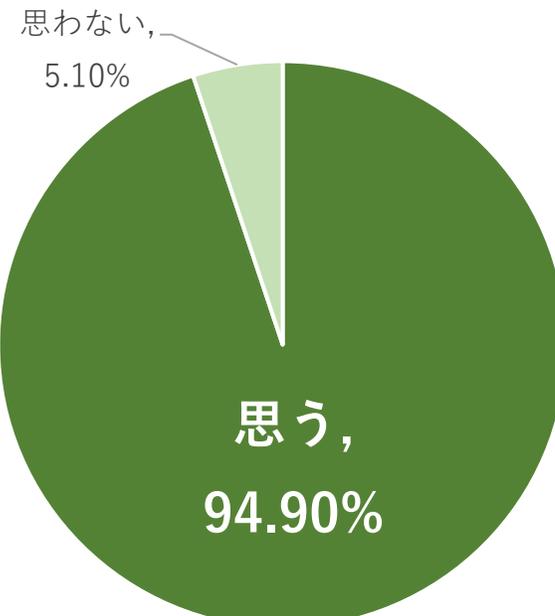
新たな仮説：対話のきっかけを求める「パパ」たち

インタビューで「パパ友を作る機会がない」という声が上がっていたことに着目。

あなたにはパパ同士の“パパ友”はいますか？



「“パパ友”がいてよかった」と思いますか？



資料：子育て世代向けメディア「kufura」2024年実施アンケート

仮説：パパ友がない男性が大多数を占める一方で、いる人の満足度は極めて高い。
ここに大きな機会（ポテンシャル）がある。

実証実験：「仙台パパの楽しい子育て作戦会議」



■開催の詳細

日時：2025年12月14日（日）10:00 - 12:00

場所：Five Bridge

参加者：パパ6名 + 子供6名

開催の意図

対「参加者」への意図

主体性の回復

- ・当事者である親自身が「**自分にとっての楽しさ**」を真剣に考え、定義しなおす機会に。
- ・解決策ではなく「**きっかけ**」を提供する。

『本音』で話せる安全な場の創出

- ・形式的な交流ではなく、職場や家庭では吐露できない弱音や**本音を語り合える**「**心理的安全性**」の高い場を提供する。
- ・**孤立感を解消**する。

対「運営」への意図

再現性の高いモデルの検証

- ・「準備ゼロ、道具ゼロ」という**低いハードルで開催**
- ・行政主導の大きなイベントで市民レベルで、「小さな対話の場」が**再現可能**であるかを検証。

パパが繋がるための仮説：キーワードは「ワガママ」



従来の育児講座：
「おむつの替え方」 「育休の取り方」



チームAの提案：
「パパのワガママ（本音）」

誰かのための「良いパパ」ではなく、
自分自身の「楽しい」を語る時、初めて本音の共感が生まれる

WSの設計①：開始5分の不安を消す「安心設計」



- 多様な価値観を受け止める
- ここだけの話
- 子供のわちゃわちゃ大歓迎！

「グランドルール」

参加者が安心して話せるためのルールを合意



「俺の日常展」

準備不要で、パパ人柄がわかる自己紹介

WSの設計②：願望を作戦に変える「ワガママ・キャンバス」



パパにとって「壁」になっていたのは、お金・施設の不足・時間などではなく「罪悪感」「家庭への遠慮」「心のゆとり（余白）」などだった

WSの設計③：明日へのアクション宣言



円形になって、明日からできる一歩を
「仲間」と分かち合い、宣言し、鼓舞しあう

結果検証：参加者の声が証明した、対話の場の価値

満足度
100%

次回参考意向
100%

「パパだけで集まった経験がなく、コンセプト自体が面白い」

「同じ悩みを持つ仲間がいると知れて安心した」

「普段は蔑ろにしていることを考える機会になった」

成果の深掘り：生まれたのは「仲間」という持続可能な種

●目標

イベントを一回開催することではなく、
持続可能なつながりの「種」をまくこと

●結果

- ・アンケートで参加者複数名が「連絡先を交換した」「また会う約束をした」と回答
- ・WS終了後も自然な会話が続き、交流が生まれていた



考察

ワークショップは「関係性」継続のきっかけになりうる

ワークショップを通じて一度「本音で話せる仲間」になれば、
参加者同士のコミュニティが自走する可能性がある

今後の課題

非アクティブ層への アプローチ

個人の呼びかけや、単なる「パパの集まり」というテーマでは、警戒心や心理的ハードルが高く、非アクティブ層は参加しにくい。

- ・ 仙台市を協働者として巻き込む
- ・ 「子育て」以外のフックを用意
- ・ 予約不要、出入り自由などの設計

対話の『質』と『環境』

子連れOKしたことで、対話に集中しきれない場面もあった。

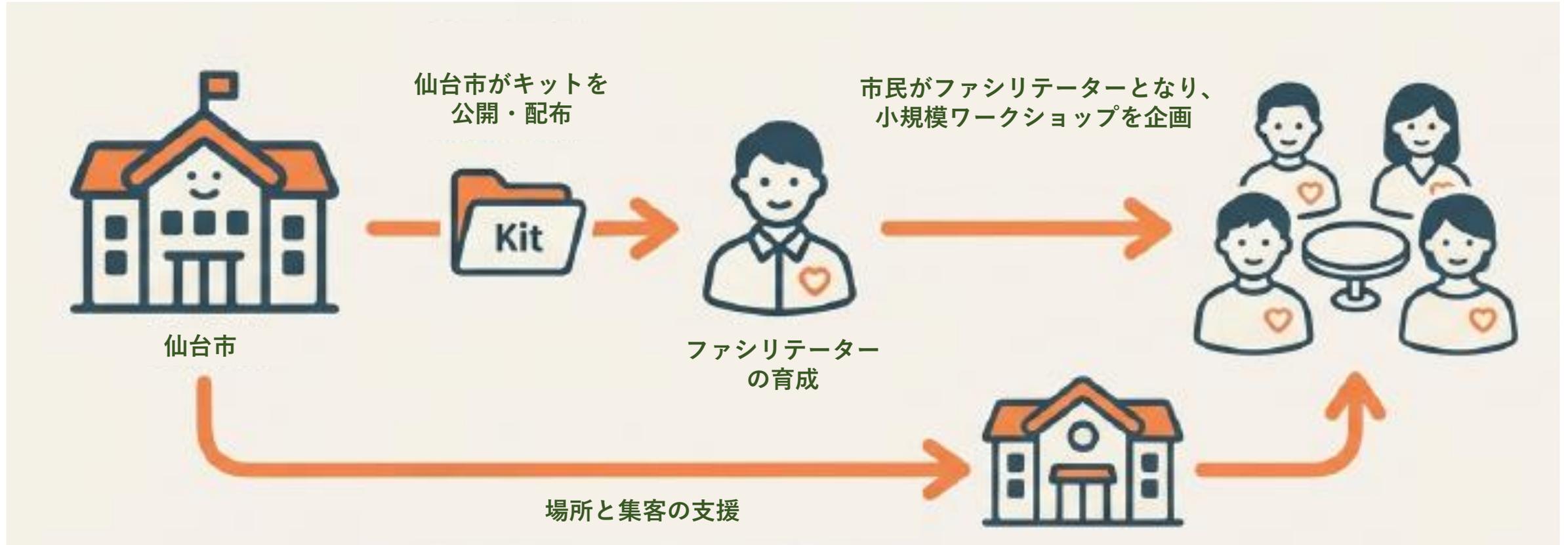
- ・ 子供を見守るスタッフの配置
- ・ 子供も参加できるワークショップの仕立て
- ・ 問いの設計の工夫

コミュニティの 『持続可能性』と『自走』

主催者側が頑張って企画・集客し続けるモデルは疲弊し、長続きしない。

- ・ 誰でもこのワークショップを開催できる「開催キット」の作成
- ・ 行政と連携した主催者の育成

ありたい姿：行政と市民で「ミニ・コミュニティ」を共創する



低コスト・高回転で、市内各地に「ミニ・コミュニティ」を育む

私たちの旅から見つけた「子育てが楽しいまち」の正体



行政が提供するサービスやイベントが充実しているだけのまちではありません。

それは、父親も母親も一人の人間として**本音を話せる**場があり、**孤立せず**に**いられる**まち。

大きな仕組みに頼らなくても、**市民が主体**となって小さな「つながりのきっかけ」を自然発生的に生み出せるまちです。



必要なのは、ゼロからの大きな一歩ではない。
既に踏み出されたこの「はじめ（A）の一歩」を
仙台市全体へ広げていきます。

ご清聴ありがとうございました



Step A～パパとまちラボ～
安倍、大川口、嘉手川、加藤、佐久間、佐藤、田口